

令和4年度 友松会総会 【報告】

日時 令和4年6月26日(日) 13:30～

会場 横浜市教育会館ホール

友松会スローガン「深まろう 高まろう つながる会員 つながる大学」

～ 新しい時代にふさわしい豊かな活動を ～

＝ 総会次第 ＝

第Ⅰ部 総会

開会のことば 国歌斉唱 物故会員への黙禱
会長あいさつ 実行委員長あいさつ
来賓祝辞 来賓紹介・祝電披露 会務報告
松沢研究奨励賞贈呈
退任役員紹介・感謝状贈呈 新任役員紹介
閉会のことば

第Ⅱ部 研究発表会

開会のことば 発表者・講師紹介 研究発表
講評 閉会のことば

第Ⅲ部 次期総会に向けて

師範学校校歌斉唱 学生歌「みはるかす」斉唱
次期総会開催ブロックあいさつ
閉会のことば

小島 勝 会長あいさつ (要旨)

友松会総会も3年ぶりの開催となりました。

2年前には、海老名の地で開催する予定でしたが、延期そして中止ということになりました。その間、県央ブロックの皆様には総会準備を進めていただき、感謝申し上げます。

さて、本総会を開催するにあたっては、コロナ感染防止を第一に考え、午後の開催としました。また、参加者数も減らし、ご来賓の方々も教育学部長をはじめ、歴代の3名の会長にご臨席賜ることに致しました。

本日の総会出席予定者は136名ですが、ご参会の皆様が過ごされた学園生活は、鎌倉、清水が丘、そして、常盤台とそれぞれに違いがあります。しかし、友松会の歴史はその間脈々と続いてきました。

これからの友松会では、それぞれの学園生活における友松会への思いや願いを生かし運営に



あたりたいと思います。多くの会員の皆様の声をお聞かせください。

母校である横浜国立大学は2度の改組を踏まえ、教育学部として6年目を迎えます。その間、一時的には教員への就職率が5割に届かないこともありましたが、教員採用試験の合格者は受験者の7割を超えるのに、教員試験を受験する者が少ないというのが課題でした。

こうした状況の中、友松会では、学校現場に多くの人材が就職できるよう、大学とも連携し教員採用試験の事前指導や面接指導などを行っているところです。

また、友松会としても、会費納入率低下の問題のほかいくつかの課題がありますが、こうした課題は今後の活動で解決していく所存です。来年も今年に引き続き川崎での総会開催を祈念します。

▽来賓祝辞▽ (要旨)

横浜国立大学教育学部長

友松会名誉会長 木村 昌彦 様

本日は、大学でオープンキャンパスが開催され先程まで高校生たちと対話していました。

さて、大学の現状ですが、いくつかの改組がありましたので、ご報告申し上げます。

まず、入学定員が230名から200名になりました。また、教育学部が学校教員養成課程のみとなり、スリム化されました。さらに入学試験における推薦およびAO入試の割合を50%、一般入試を50%と致しました。

こうした改革は、「本当に教員になりたい」と思う教員志望の学生を確保することが目的であり、高大接続もさらに重視したいと思います。

また、大学院の修士課程は廃止し、教職大学



院の定員を60名としました。これは、総合大学の中での定員数としては最大で、例年、定員数を上回る希望があります。

来月には文部科学省のヒアリングがありますが、こうした実績も評価してほしいです。

さらに、多くの企業の人事担当者から「国大の卒業生は質が高い」「優秀で人との対話力にも優れている」といった評判があり、関東近県では横浜国大の人気はトップに上がっています。

大学では、こうした声も耳にしながら、「学校現場に多くの学生を就職させたい」という思いで学校運営に取り組んでいます。特に、教員志望の学生でないとついでにこられないような実践的な授業を多く行っています。今後も、教員になりたいという受験生が多く入学できるよう努力をしていきたいです。

話は少しそれますが、東日本大震災の際に、派遣された東京のハイパーレスキューでの「屠龍技」（とりゅうのぎ）という言葉が話題になりました。「屠龍技」とは、実際には現れない龍のために体を鍛え努力をすること、つまり、無駄な努力という意味があるそうです。

しかし、今の教育現場では、いざという時を考え、使わなくてもよいことでも様々なことを学んでおく必要があると思いました。

私は6年間、横浜国大附属鎌倉小・中学校で校長を務めました。学校現場は本当に楽しかったです。そして、最近はその場で出会った教え子たちと大学で出会うことがあります。それは、本当に嬉しいものです。

3年ぶりの総会、おめでとうございます。

▽松沢研究奨励賞贈呈▽

令和2年度

大和市立渋谷小学校教諭

加藤 隆太

綾瀬市立綾北小学校教諭

酒井慎太郎

令和4年度

横浜市立大岡小学校主幹教諭

紺野 達也

湘南三浦教育事務所職員課副主幹

増子 朗



松沢研究奨励賞 研究発表

[研究内容は「友松112号」に掲載]

○紺野 達也氏 研究主題

「願いの実現に向かい、

豊かな自分を創る子どもの育成を目指して」

講評（要旨）

大内美智子氏 横浜創英大学こども教育学部長・教授

子どもが、どうして実践できたのか、学ぶことから考えていきたい。

今は、脳を作る段階で人工の脳をシャーレのなかで小さな赤ちゃんの臓器を作ってしまう。技術革新がきている。これから、すごい世界がやってくる。

10年後20年後に生きていくためには、どんな力が必要であるか。知識・技能、人間性、思考力・判断力・表現力である。

1. 大岡小学校の基盤となるものは「子ども中心の教育」

6年生になるまで地域の人と関わってきた。

2. 丁寧な学びの過程の創造（単元づくり）

学びのストーリーをイメージする。

3. 丁寧な学びの過程の創造（授業づくり）

大岡小学校は、子どもが願いをもってその実現に向けて力を発揮する教育の営みを20年以上取り組んでいる。6年生になるまでに地域の人と関わる活動をやってきた。この学びは、これからの社会に力強く生きていく原動力になることと思う。

○増子 朗氏 研究主題

「一つの作品に時間をかけて取り組む

図画工作科の題材研究及び実践共有の試み」

講評（要旨）

和泉 清勝氏 友松会前副会長

提案の骨子は「図工の題材にかかわる時間の保障」で、題材の内容を吟味して、作品にかかる時間をたっぷり与えて、創作することがなにより大切だと提案しています。

美術題材を完結させるために具体的な「しかけ」が必要です。「用具・用材を豊富に用意して遊び感覚で体験できる」ことや「モチーフ（主題）を設定する」などです。

また色が付くと格段に存在感が増し、実に表情が豊かになります。

研究会や交流会を通して実践を共有していくことは教科の発展（の機会）となり、会が盛り上がると人を育てる場になります。